

被害レベルからみたサルの追い払い形態の特徴

—三重県伊賀市を事例に—

The Characteristics of Forms of Chasing-off Monkeys by Damage Levels

-A Case Study in Iga City, Mie Prefecture-

○東口阿希子* 九鬼康彰* 武山絵美** 星野 敏* 橋本 禪*

○Akiko Higashiguchi, Yasuaki Kuki, Emi Takeyama, Satoshi Hoshino and Shizuka Hashimoto

1. はじめに 深刻化するサルによる農業被害の対策として、サルに人への恐怖意識を学習させる追い払いが全国各地で実施されている。特に集落の全員がサルを追い払う「集落ぐるみの追い払い」が有効とされ、サルの人慣れが進行する前から着手することが重要であるとされている。しかし、実際には人手不足等の理由から集落ぐるみでの取り組みが困難であったり、被害が深刻化するまで実施しない集落が多いと考えられるが、追い払い形態や取り組み意向についての実態はほとんど見られない。そこで本研究では、集落ぐるみの獣害対策を推進している先進的な自治体を対象に、集落ぐるみの追い払いの実施状況や今後の取り組み意向と被害程度との関係を明らかにし、今後必要とされる追い払いの形態について考察する。

2. 研究の方法 対象地における獣害対策と被害の実態及び今後の取り組み意向を把握するため、2011年12月に区長を対象とするアンケート調査を実施した。全277区長に配布し231集落から回答を得た(回収率83.4%)が、本研究ではサルによる被害が発生していると回答した121集落(43.7%)を分析対象とした。なお回答にあたっては、集落内の詳しい人に相談して良いものとした。また分析にあたっては、被害程度に関する3項目(被害頻度と出沒頭数、群れの人慣れ程度)の回答から各集落の被害得点を算出し、さらに被害得点を25点ごとに分けて4段階の被害レベルを設定した(表1)。

3. 対象地の概要 本研究では三重県北西部に位置する伊賀市(農家数6120戸、経営耕地面積5253ha、2005年)を対象とした。市では2008年度より県と連携して集落ぐるみの獣害対策を全ての農業集落に対して働きかけ、要望のあった集落に対して支援を行っている。恒久防護柵の設置や研修会の開催と共にサルの追い払い隊も整備され、2010年度までに10集落がモデル地区として育成されており、集落ぐるみの獣害対策の先進地と言える。

4. 結果と考察 アンケート結果によると、現在の追い払い形態は「個人で実施している」

集落が51.9%と最も多く、「集落ぐるみで実施している」集落は28.8%にとどまり、先進地であっても未だ多くの集落が集落ぐるみの追い払いに取り組めていな

Table 1 被害レベルの算出方法
Calculating the damage level by monkeys

項目	選択肢
被害頻度	「数ヶ月に1回程度」から「1日に複数回」の8段階
出沒頭数	「1~5頭」から「51頭以上」の5段階(「わからない」は除外)
群れの人慣れ程度	「人の姿をみると、遠くにいてもすぐ逃げる」から「人に噛みつく、ひっかく、人が持っているものを奪う」の6段階

$$\text{被害得点 } S = \left(\left[\text{被害頻度} \right] \times 100 \div 8 + \left[\text{出沒頭数} \right] \times 100 \div 5 + \left[\text{人慣れ程度} \right] \times 100 \div 6 \right) \div 3$$

被害レベル: $S < 25$ であればレベル1, $25 \leq S < 50$ であればレベル2, $50 \leq S < 75$ であればレベル3, $75 \leq S$ であればレベル4, とする

*京都大学大学院農学研究科 Graduate School of Agriculture, Kyoto University

**愛媛大学農学部 Faculty of Agriculture, Ehime University

キーワード; 獣害対策, 追い払い, サル

いことが明らかになった。続いて被害レベルと追い払い形態のクロス集計を Fig.1 に示す。レベル 4 では集落ぐるみでの実施が 80.0% を占めたものの、被害程度が下がるにつれて集落ぐるみの取り組みは減少し、レベル 1 では個人での実施が 66.7% を占めた。これは、被害レベルが低い段階では集落ぐるみ以外の形態でも効果が得られているからと考えられる。

次に、被害レベルと今後の追い払いの実施意向のクロス集計を Fig.2 に示す。レベル 1 からレベル 3 では「集落ぐるみで実施したい」との回答が最も多く、「実施したいと思わない」や「個人で実施したい」の回答は現在の当該集落数よりも減少している。これは県と市

が推進している集落ぐるみの獣害対策の重要性は広く認識されている結果と言える。一方レベル 4 では、現在集落ぐるみで実施している集落の半数が「周辺の集落と協力して実施したい」と回答している。また、周辺の集落との協力を志向している 10 集落のうち半数は、現在集落ぐるみで実施している集落であった。被害が深刻な集落は十分な効果や満足が得られていないために、また被害の軽い集落は十分な人手を得られていないために、集落ぐるみに代わる新たな取り組み方を必要としていると考えられる。追い払いの実施によって隣接集落へ被害が拡大してしまう事例も報告されており、人手や効果を確保しながら被害の拡大を防ぐために、今後は集落を越えた広域での一体的な追い払いを行う必要があると言える。

一方で、レベル 3 以上の集落のうち約 2 割が「実施したいと思わない」または「個人で実施したい」と回答している。そこで、これらの集落を農林業センサスや人口統計資料を用いて市内の他の集落と比較した結果、農家数が少ない、農家率が低い、経営耕地面積が小さい、区画整理率が低い、農地の傾斜が大きいといった特徴を持つことがわかった。またサルによる食害を受けやすい畑や樹園地の割合が比較的高いこともわかった。つまり被害が深刻であるにも関わらず集落ぐるみの対策に消極的な集落は、人手や地形、土地利用の面から追い払いの実施が困難な状況にあると言える。しかし、このような集落が必要な対策に取り組まない状況が続くと、群れの人慣れ程度の進行や周辺地域への被害拡大のおそれがあるため、周辺集落や行政による支援が必要であると考えられる。

5. おわりに 今後は広域での追い払いの実施方法を確立し、その効果を検証するとともに、広域での対策に適した集落特性を解明することが課題である。

謝辞 本研究は平成 23 年度科学研究費（課題番号 23580331、代表：九鬼康彰）を受けて行った。調査にあたって多大なご協力をいただいた三重県農業研究所と伊賀市、そして区長をはじめとする住民の皆様にご礼申し上げます。

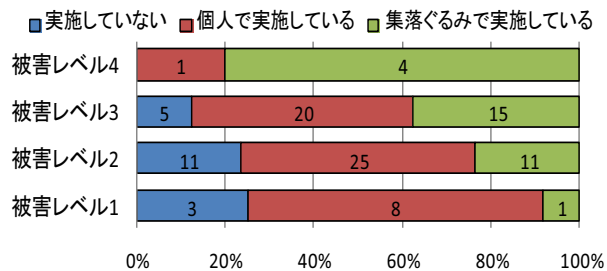


Fig.1 被害レベルと追い払い形態の関係
Relation between damage levels and forms of chasing-off monkeys

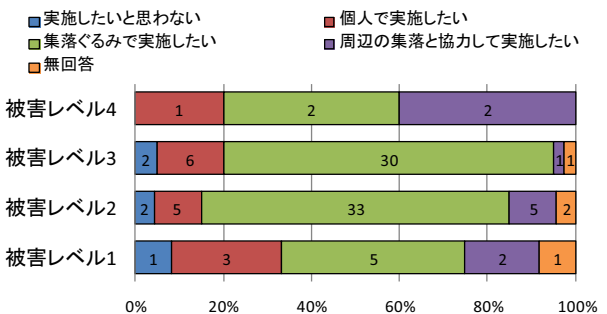


Fig.2 被害レベルと今後の追い払い実施意向の関係
Relation between damage levels and future intention for chasing-off monkeys